

## 「ドライマウスと口腔検査」



齋藤一郎（ドライマウス研究会 代表、鶴見大学歯学部病理学講座 前教授）

口腔乾燥症（ドライマウス）に罹患していると考えられる潜在患者数は、欧米で報告された疫学調査から算出すると日本国内で約 800 万人から 3000 万人と推定されているが、本症の認知度は低く、自覚症状があっても受診されていない、あるいはどの診療科を受診すべきか知られていないのが現状である。さらに診断法や対処法も普及しておらず、その受け皿となる医療機関も限られており、本症の普及や検査法ならびに有効な対処法が求められている。

ドライマウスは、さまざまな病態が複合して発症する 경우가少なくない。生活習慣病や更年期障害がその複合的な病因の一つとなる。特に、増齡的に様々な要因により発症することが多いことから、単に加齢により乾燥するという判断は安易であり、断定して患者に伝えることは適切とは言い難い。

服薬大国といわれる日本では、医療者だけの問題ではなく、受療者自身が薬に依存するという意識をまだまだ根強くもっている。口渴を訴える薬剤は降圧薬、抗うつ薬、睡眠導入薬などがあり高齢者で服薬の可能性が高いとはいえ、複数の要因が加わってドライマウスを呈することが極めて多いと推測できる。このことから口腔乾燥症状に対する対症療法のみならず、生活習慣に対する指導、さらに心身症としての対応も必要となる。

ドライマウスの罹患は口腔内だけでなく、摂食・嚥下機能の低下、誤嚥性肺炎、上部消化管障害の原因となることも明らかである。特に高齢者では肺炎のリスクが高く、唾液量減少への対処は重要な意味をもつ。さらに、口腔内の不快感に不安をもつことによる精神神経的な影響も考慮しなければならない。

先進国での医療の大きな役割のひとつに「QOL の向上」が問われて久しい。生活の質を高めるためのニーズを見据えた新たなアプローチは産学の連携で模索されるべきであろう。

本講演では演者のこれまでの研究活動の一端とドライマウス研究会（会員数 4825 名）やドライマウス患者友の会（会員数 785 名）の活動を紹介しますと共にドライマウス診療における臨床検査の実際について概説する。

### 略歴

1954 年東京生まれ

1974 年松本歯科大学卒、日本大学歯学部病理学教室 助手

米国スクリプス研究所免疫部門 博士研究員、東京医科歯科大学難治疾患研究所 助教授

徳島大学歯学部病理学講座 助教授、2002 年 鶴見大学歯学部病理学講座 教授/ドライマウス研究会設立、

2008 年 同大附属病院長（4 年間）、2022 年 同大定年退職

## 受賞歴

- 1994 年 日本リウマチ財団 奨励賞
- 2002 年 歯科基礎医学会 ライオン学術賞
- 2003 年 日本病理学会 学術研究賞（A演説）
- 2011 年 日本シェーグレン症候群 学会賞
- 2020 年 日本病理学会 日本病理学賞（宿題報告）